

トータルコミュニケーション研究会の歴史 設立前後の状況

矢沢国光インタビュー 第3回

実施日 2023年10月16日（月）13時～14時30分（1時間30分）

話し手 矢沢国光

聞き手 上農正剛

ZOOM 動画記録の文字起こし担当 上農

ろう教育の明日を考える連絡協議会の設立経緯

上農／それでは今日は第3回のインタビューになります。よろしくお願いいたします。

矢沢／今日は「ろう教育の明日を考える連絡協議会」の話を中心にしたいと思います。それで、手元にあまり資料がないのですが、というのは人に全部あげてしまっているのです。そちらに何かこれについての資料はありますか？

上農／特別に私の手元にはありません。先生のお話を聞くしかないのですが。

矢沢／「ろう教育の明日を考える連絡協議会」というのは途中から名称が NPO 法人の「ろう教育を考える全国協議会」というのにならなくなって、今、「ろう教育の明日」というこういう冊子を出しています。これはそちらの方に行っていますか？

上農／それはまだ来ていません。

矢沢／これは会員に配布するというので。中身は最近たいしたことないのでほとんど読んでないのですが・・・それで、こちらで記憶を頼りに話しますが、丁度この 80 号という号にこの会の 30 年間の歩みというもの載っていて、写真やなんかもあります。第一回が 1989 年の 8 月に大阪で開かれたということです。

全日本聾唖連盟はトータルコミュニケーション研究会を不承認

上農／先生、この連絡協議会が立ち上がったのはどういう経緯からなんですか？

矢沢／その経緯については今、お話しします。前のインタビューでお話ししたように東京を中心としてトータルコミュニケーション研究会ということをやって、栃木聾学校と足立聾学校なんか研究して同時法ということをやっていたわけです。その同時法に対して、全日本聾唖連盟は同時法的手話を認めないという形で来たわけです。そういう意味ではトータルコミュニケーション研究会という活動そのものに対して聾唖連盟の方は認めない。

特に手話については認めないという姿勢がずっと続いていたんですが、それがある時から聾唖連盟の考え方が変わりました。それがどうして変わったのかということは聾唖連盟内部のことだからこちらにはわからないのですが、当時の理事長は高田英一さんでした。

高田英一全日本聾唖連盟理事長との直接会談

矢沢／それで私が前にお話ししたように、関係のあった野沢克哉さんが、「高田さんがト

「トータルコミュニケーション研究会の方と話し合いをしたいと言っている」と言って、仲介した形なのです。それで一度話してみたらいいということになりました。高田英一さんは京都の宇治に住んでいたんです。今でもそうだと思います。それで私が高田さんの自宅まで行きました。高田さんとはその時、初対面でした。それで、高田さんといろいろ話しました。

全日本聾啞連盟との和解

高田さんはトータルコミュニケーションということで手話を聾教育に使うということは聾啞連盟としても推進したいということで、トータルコミュニケーション研究会と一緒にやりたいということで合意しました。

上農／矢沢先生が高田英一氏に会いに行かれたというのは何年の何月頃の話ですか？

矢沢／それが、手元に何も記録がないのでわからないのです。

上農／大体、何年頃かというのはわかりますか。

矢沢／第一回の連絡協議会が1989年ですから、それ以前であることは間違いないだろうと思います。それで、トータルコミュニケーション研究会と全日本聾啞連盟の二つが中心となって聾学校に手話を導入するという運動を作っていこうということ合意したんです。

事前対策としての「ろう教育に手話を」討論集会

第一回の協議会をやる前段階として、前の年の1988年に2回、聾啞連盟と一緒に「ろう教育に手話を」討論集会」というのをやったんです。この冊子（トータルコミュニケーション研究会会報 増刊号「1.15 「ろう教育に手話を」討論集会の記録」1988年刊）は持ってないですか？

上農／持っていません。

矢沢／この冊子はトータルコミュニケーション研究会の会報の増刊号という形になっているんですが、実はこの集会は2回やっているんです。2回目の集会の冊子というのが手元にないんですが、で、これを見ると実行委員会がトータルコミュニケーション研究会からは伊藤政雄さんと、この間そちらにメールでもって送りましたが倉方厚子さんという子どもを育てている親でその親の会の会長でもあった人が出席しています。

上農／親子キャンプもやってらした方ですね。

矢沢／この方はあとで東聴連の会長もやった人なんです。それと私の三人なんです。全日本聾啞連盟の方は河合洋祐さん、この方は埼玉県出身の聴覚障害者で中途失聴の人です。野沢克哉さんと黒崎信幸さん、この人はどこの人だったか忘れましたが。高田さんはこの時は入ってないですね。それから関東聴覚障害学生懇談会から木村晴美さんと上嶋希世子さんが参加しています。それから全通研（全国手話通訳問題研究会関東）から石川芳郎さん、この方は御存知ですか？

上農／いや、存じ上げないです。

矢沢／東京都心身障害者センターだったかな、新宿にある野沢さんが勤めていた・・・

上農／私はそこに野沢先生にお会いするために行ったことがありました。

矢沢／その職員で石川芳郎さんという人がいて、その人がこの時は全通研関東ブロックの責任者で、その後、全通研の会長もやった人です。それと古木美智子さんは御存知ですか？もう亡くなったけれど、神奈川県聴覚障害者親の会の方で、この時は息子さんがもう学生だったのかな、御夫婦で非常に熱心に活動されていて、聾教育に手話が必要だということですとずっとやっていて、親の会の実力者でした。その五団体で実行委員会を作ってやったわけです。

上農／先生、その資料ですが出来れば一度見せていただきたいのですが。

矢沢／ええ、送りますよ。この資料はそこら辺にはないと思いますので。

上農／ありがとうございます。これはとても大事なエポックですね。

矢沢／この時、高田さんが挨拶を寄せていて、野沢さんが代読するという形でやっています。その他に挨拶としては日本聾話学校の大嶋（功）先生は御存知ですか？

上農／存じ上げています。

TC 研顧問の大嶋功先生の挨拶－「TC は“理念”であって固定的な方法ではない」

矢沢／大嶋先生はこの時、トータルコミュニケーション研究会の顧問でした。写真も載っています。

上農／大嶋先生はどのタイミングでトータルコミュニケーション研究会に関わられたのでしょうか？最初からですか？

矢沢／いつからかはわからないんですけど。

上農／創設時のメンバーではないでしょう。

矢沢／それは違います。

上農／大嶋先生は基本的には口話法の考え方ではなかったのでしょうか。

矢沢／まあ、そうですね。でも、大嶋先生は聴覚障害者の教育とか福祉全般について熱心で熱意のある方でした。

上農／大嶋先生はその当時は手話についてはどういうお考えだったのでしょうか？

矢沢／教育方法としてはやはり口話だという考えだったんですけど、やはり聴覚障害者の歴史を見れば、手話を必要としていたということもあると考えていたと思います。

上農／確か大嶋先生は東大の言語学科の御出身でしたよね。

矢沢／そうですね。その際、大嶋先生が言われたのはトータルコミュニケーションの理念ということですね。要するに、口話でなければいけないとか、手話でなければいけないとかいうことじゃなくて、その人にとって適した方法が教育として採られるべきである。それがトータルコミュニケーションの理念なんだと、その考えには賛成だったと思います。

上農／じゃあ、その討論集会で連絡協議会の基本的方向性が準備されたということですね。そういう理解でいいんでしょうか？

矢沢／そうですね。これを1988年の1月15日に、東京都障害者スポーツセンター、確か王子だったかな。これともう一回、別の場所でやっているんです。

上農／記録を見ると第二回が専修大学と書いてありますが。

矢沢／それはどこに書いてありますか？

上農／それは「30年記念誌」の96頁の年表に書いてあります。1988年の所の右側の欄にそのことが記されています。これは第一回も第二回もメンバーは同じ方たちが集まったんですか？

矢沢／ほぼそうでしょうね。第二回の記録が手元にないんですが。

上農／この時の話し合いで明日を考える協議会を作る上でこんな話があったというような記憶に残ることはありませんでしたか？例えば意見がぶつかったとか。

矢沢／討論集会そのものはそういう話し合いの場ではなくて、「聾教育に手話を」という、そういう気運を盛り上げていこうという決起集会のようなものだから、細かい打ち合わせについては、あれどういうふうに進めたかなあ。聾啞連盟の方は事務局長になったのは遠藤勝さんという、亡くなった方ですが。遠藤さんと直接話したのかなあ。そこら辺はよく覚えていません。

1989年「ろう教育の明日を考える連絡協議会」の結成大会（大阪）

上農／その翌年の1989年に「ろう教育の明日を考える連絡協議会」の結成大会を大阪でやってらっしゃいますよね。大阪になったのは何か理由があるのですか？

矢沢／聾啞連盟の教育部門というのが関西にあったし、高田さん自身も京都にいらしたから。事務局長の遠藤さんも和歌山ですし。やっぱり京都聾学校とか大阪の市立聾学校がありましたからね。

で、この様子は聴力障害者新聞に載っています。ここにあるのは「ろう教育の明日」の2019年3月発行の第80号ですが、これも後で送ります。

この時、記念講演を筑波大の上野先生にお願いしました。上野先生は御存知ですか？

上農／益雄先生ですね。知っています。今、先生がお話くださっている「連絡協議会」が設立される前後の経緯については、今までどこかに書かれたり、どこかで話されたりしたことはありますか？

矢沢／TC研の会報とか、「明日を考える連絡協議会」がそういう会報を出していましたから、そちらの方には書いていると思います。それとは別に書いたことはないですね。

上農／高田英一さんの所に先生が行かれたというようなことは。

矢沢／そういうことは別にどこにも書いていません。

上農／そのような経緯で聾啞連盟とTC研が歩み寄れたということですね。

それから「30年記念誌」を見ると、1989年に第一回「ろう教育を考える全国討論集会」が開催されたとの記載がありますが、そこに片仮名で「ボウ講演会」と書いてあります。この方は誰ですか、アメリカかなんかから来られた方ですか？

矢沢／あー、これはアメリカ人ですね。これは何が問題だったのかな？

上農／これは大阪でやった後に別に、東京の戸山サンライズで講演があったということでしょうか？戸山サンライズというのは早稲田大学のそばにある福祉関係のいろいろな事務所が入っている施設でしょう。これはそこを借りて講演会をやったということでしょうか。

矢沢／ボウさんという人が面白い役割を果たしたんですよね。会報を見れば載っていると思うんだけど。

上農／私は初めて聞いたので、どんな方だったのかと思って。「面白い役割を果たした」というのはどういうことですか？

矢沢／何が課題だったのかなあ・・・そこがちょっと思い出せないんですが。何かアメリカの聴覚障害者運動の中で社会的にアピールするような、その運動のきっかけを作った人なんです。それで注目されていた人で。

上農／これは記録がどこかに残っていますかね。

全国討論集会の参加者が会を重ねるごとに徐々に増えていく

矢沢／TC 研の会報に載っていると思います。で、全国討論集会在第1回が大阪で、「30年記念誌」を見ると385名参加、第2回が埼玉で561名、第3回が滋賀で657名、第四回で東京に来て、中野文化センターで833名だったんですね。

上農／これは参加者の人数がどんどん増えていっていますが、手応えというか、関心の高さがこれだけあるなという感触がありましたか、当時？

矢沢／第5回が京都で880名。当時、聾教育の全国研究集会というものが、所謂官制というか、聾学校の校長会が主催する「全日聾研」（全日本聾教育研究大会）というものがありました。今でも続いています。あれは公式の研修会で、教員は学校の出張扱いで参加したり出来るんです。討論集会有る意味でそれとは全然別で、当事者と聴覚障害者とか聾者とか教員有志とか、そういう人たちが中心となった民間の研究會ということ。そういうことでは聾教育の研究會としては初めて出来たものだったと思います。

聾学校で今まで口話法だけでやっていたような教員もこの「討論集會」に参加する人がどんどん増えてきて、そういう意味では「全日聾研」よりもある意味で面白い内容があるという評価を貰ったんですね。分科会もいくつも増やしたりして、第6回以降は記念誌には書いてないんだけど、大阪、埼玉、滋賀、東京、京都、それから千葉かな・・・

上農／先生、第6回が千葉で、第7回が和歌山、第8回が神奈川、第9回が福岡と書いてあります。第9回が福岡、ここまでは記録に残っています。

矢沢／西と東と交互にやろうということをやったのです。奈良はどこだったかな？

上農／いや、奈良は記録にはありませんよ。

矢沢／奈良の大会はすごくよかったですよね。やる度に報告書を出しています。報告書には分科会の記録とかを載せるんですが、編集が難しく、聾学校の教員でやると、そういうことがしっかりやれる人がいないと出来ないんです。奈良の場合は奈良聾学校が中心

となってちゃんと出来たんです。

上農／1997年の福岡の後ではありませんか、記録には残っていませんが。

矢沢／そうかも知れません。去年か今年か「ろう・難研」でもってオンラインで研究会をやって、福岡聾学校の人たちが報告したりしましたが、それに参加していましたか？

上農／いえ、私はしていません。

矢沢／福岡でそういう状況が育ったというのも、ある意味では福岡でやった討論集会の影響が残っていたからということがあるんですよね。

上農／なるほど・・・しかし、奈良はどこだったんでしょうかね？すみません、話がまた前後して戻りますが、「30年記念誌」の96頁の年表の1988年の部分で「TLTP 開講」と書いてありますが、これは何のことですか？

矢沢／「トータルコミュニケーション・リーダー・トレーニング・プログラム」のことです。まあ、気張ってそういう名前を付けて、やったんです。これに大嶋先生なんかに来て貰ったんです。

上農／ということは、TCを広げるための指導者みたいな人間を養成するということだったのでしょうか？

矢沢／ええ、そうです。

上農／それから五月の小研究会という所に高橋潔先生の名前がありますが、これは？

矢沢／これは高橋潔校長についての話ということです。

上農／川淵依子さんの御名前もあるので、娘さんが父親だった高橋先生の話がされたということですね。

矢沢／川淵依子さんのことは御存知ですか？

上農／はい、『指骨』という本を書かれていますね。じゃあ、「小研究会」とは別にTC研の「大会」もやっていたわけですよね。さらに、また別に「討論集会」もやっていたわけですね。

矢沢／「討論集会」は「ろう教育の明日を考える連絡協議会」の主催ですから。

上農／組織的にそれはそうですが、一年間でこれだけの企画が立て込んでいるとそれぞれの準備が大変だったでしょう。それだけ盛り上がっていたということなのでしょうけれど。

また話が戻りますが、聾啞連盟の方から関係性を見直そうという形で、野沢先生を仲介役として高田英一氏が提案してこられたという話ですが、それまでのトータルコミュニケーション研究会との関係を見直そうというのは高田さん個人のお考えだったのでしょうか？

矢沢／聾啞連盟の活動としては福祉団体だから、厚生省と交渉して聴覚障害者の福祉の充実を実現していくということが中心ですよね。聾教育そのものについての何か活動ということは過去に何もしていなかったと思います。だけど、聴覚障害者の中から聾教育でやはり手話を使う必要があるんだという、そういう運動が盛り上がってきて、それは無視できないと多分なったのだと思います。だから、聾啞連盟の活動として、福祉的な活動だけで

はなくて、そのような教育分野にまで活動を広げようという考えがあったのだと思います。それまでは文部省（当時）との交渉は聾啞連盟としてはなかったと思います。それで安藤さんが「明日を考える会」の会長になった時に、安藤さんと一緒に文部省と初めて交渉をしたという記憶があります。大したことはなかったんですが。

上農／じゃあ、この「連絡協議会」が出来た時は安藤さんが聾啞連盟の会長だったのですか？

矢沢／理事長が高田さんで・・・

上農／初代の「明日を考える会」の会長はだれだったのでしょうか？

矢沢／ちょっとそこら辺はよく覚えていません。

上農／わかりました。もう一度、確認ですが、「明日を考える連絡協議会」があって「全国討論集会」を開催する、と。その予稿集のような記録の編集とかの事務は TC 研がやっていたのですか？

矢沢／討論集会ごとの報告書はその主催地がやっていました。奈良でやった時は奈良聾学校がやりました。連絡協議会としての会報は事務局長が和歌山の遠藤さんで、私が事務局次長だったから私が主にやっていました。

上農／高田英一さんと先生はお歳はほとんど同じくらいでしょうか？

矢沢／いや、高田さんの方が上です。

上農／最初に高田さんの宇治のお家に訪問されて話し合いをされた時の思い出のようなものは何かありますか？

矢沢／いや、特にないですね。

上農／その時は高田さんは矢沢先生と声で話されていたか？

矢沢／そうですね、高田さんは大体声ですね。手話も使われていたけれど、聾啞者によっては高田さんの手話は読み取りにくいという人もいましたね。

上農／「討論集会」と「TC 研大会」のバランスとか位置付けというのは先生の中ではどんなふうになっていたのでしょうか？

矢沢／討論集会は全国の聾学校とか聴覚障害者団体に対してトータルコミュニケーションを広げていく場だと、トータルコミュニケーション自体の理念とか手話についての考えとか、そちらの方は TC 研の中でやると、TC 研としてはそういうような考え方をしていました。TC 研が「全国討論集会」や「ろう教育の明日を考える連絡協議会」に対しても理論的には中心的にやっていくということでした。

各地の聾学校と聴覚障害者団体の関係の様相

「明日を考える会」の方はやっぱり、奈良は聾学校が中心なんだけれど、広島にしても熊本とか福岡とか北海道とか、そういう所は聴覚障害者団体を中心となってやっていました。比較的、聾学校が大きな役割を果たしていたというのは、まあ滋賀の聾学校はキュード法だったんだけど、トータルコミュニケーションの考え方に賛同する教員も沢山いると

ということがありました。あそこは聾啞連盟が強いんです。だから聾啞連盟と教員と一緒にやるという感じです。広島もそうかな。広島の聾啞連盟も強いですね。聾学校の中には手話を使う教員が一杯いたから、これは両方ですね。どちらかと言うと広島の場合には…どっちがどっちということはないね。両方強かったです。

北海道は聴覚障害者連盟の方が強くて、聾学校の方は口話法の牙城でしたから。附属聾学校より附属らしいと言われていました。

TC研大会をする時に聾学校の校長に挨拶に行ったんですけど、旭川聾学校は割とトータルコミュニケーションに賛同する人たちも多かったですね。

上農／北海道が「口話法の最後の牙城」と言われるくらいにずっと口話法に拘っていたことについては何か理由があったのでしょうか？

矢沢／どうなのでしょうね。うーん、ちょっとわかんないですね。

上農／そういう北海道というか札幌聾学校に日本手話のクラスが最初に出来たというのも非常に何か意味深い出来事ですね。

矢沢／それはずーっと後のことですね。

ウェンディー・ルイス編著「デンマークのバイリンガルろう教育」

上農／今、先生がずっとお話しくくださった、例えば第9回の福岡の討論集会、1997年ぐらいまでは基本的にTCの考え方が基盤になっていたという理解でよろしいのでしょうか？つまり、バイリンガルという考え方はこの時まではまだ入って来ていなかったということでしょうか？

矢沢／いや、「明日を考える会」の方でバイリンガルが大きな意味を持って来たのは、これ（ウェンディー・ルイス「デンマークのバイリンガルろう教育」ろう教育の明日を考える連絡協議会2000年刊）は持っていないって言ったんですね。

上農／はい、持っていません。

矢沢／これは聾啞連盟の遠藤さんの功績だと思うんですけど、遠藤さんが聾啞連盟の団体に訪問するということをやったんです。1997年8月の福岡の第9回全国討論集会、その時、このウェンディー・ルイスさんを招待して日本に来て貰って、デンマークにおけるバイリンガルの成果という、そういう講演をして貰ったんです。で、遠藤さんが北欧に行ったのはもっと前で、いつ行ったのかな。ここには書いてないかな。その何年か前だと思うんですけどね。そうか、これは本になる前に、連絡協議会の会報「ろう教育の“明日”」の1996年7月号から同年11月第20号に5回に分けて連載したんです。巻末の記者の林恭子さんの「訳者あとかき」に拠ると。それを一冊にしたんですね。

上農／そうすると、バイリンガルが正式に入って来たのはその時だと理解していいのでしょうか？

日本の関係者が北欧のバイリンガルという考え方に接触した最初のきっかけ

矢沢／いや、だから遠藤さんたちが聾唖連盟の視察団でデンマークに行った時だと思うんですね。それでバイリンガル教育がいいとなったのだと思います。その時はこの本はまだなかったのだと思います。あとがきを見ると、1995年の和歌山大会の時に土谷道子さんって御存知ですか？筑波大の附属聾学校にいた。

上農／はい、知っています。ギャロデットに行かれた方ですね。

矢沢／その土谷さんがこの本の原本（追記：BILINGAL TEACHING OF DEAF IN DENMARK－Description of Project 1982-1992）を持っていて、この本を紹介することになったみたいですね。それで、ここからバイリンガルというものが入ってきたということです。

上農／ではもう一度確認ですが、このウェンディー・ルイスさんの論考が1996年に連絡協議会の会報「ろう教育の“明日”」に5回にわたって連載されたのがバイリンガルというものが紹介された最初だということではないのでしょうか？

矢沢／文献としてはということですね。世に出されたのは多分これが最初だと思います。

北欧のバイリンガル教育に対する印象

上農／それでウェンディー・ルイスさんの考えを通してバイリンガルという考え方に接した時、最初、先生はどのような印象を持たれたのでしょうか？

矢沢／そうですね、これはやはりすごいと思いました。

上農／どういう点がですか？

矢沢／バイリンガル教育で、デンマークで聞こえる子どもたちと同じレベルまで成長させた成果を出したということですね。

上農／当時、先生はバイリンガルとTCの違いについてはどのように理解されていたのでしょうか？

矢沢／それはこの前、話したように、TC研でもこれを視察する必要があるということでTC研としても視察旅行団を出したわけですね。そして、いろいろ議論して…。

上農／お聞きしたいのは、「今までのTCでいいじゃないか。わざわざ、バイリンガルのような新たな考え方は必要ない」という話になったのか、それとも、例えば「TCに残された問題はこのバイリンガルによってもっと改善できるんじゃないか」というような議論になったのか、当時、どんな受け止め方だったのでしょうか？TC研の中ではどのような議論があったのでしょうか？

矢沢／TC研の中ではどうだったかな。やっぱり、バイリンガルがいいという主張と、日本語の習得については同時法で成果をあげているから、それでいいのではという意見もありました。まあ、両方あったと思います。デンマーク、スウェーデンの場合は聾学校の中でのバイリンガルだけじゃなくて、小さい時から手話を教えなければいけないから、聞こえる親に対する手話の講習会とか、まあそういうのが重要で、デンマークはそういうのを行政がいろいろ募集して、そこに参加する時は費用も出すとか、そういう福祉的な政策を

やっていたわけです。日本ではそういうことが全然出来ていない。だけど、小さい子どもを持っている聞こえる親がどうやって手話を覚えるか、それは必要なことだと言って、聾学校の中に親向けの手話教室を作るとするのは各地で出来ていったと思います。

バイリンガル教育の考え方が手話の導入時期を「幼児期から」に変えた

矢沢／ただちにバイリンガルということではないけれど、手話が必要だと、手話も必要だと、それは教員だけではなくて、小さい子どもを持っている親が手話を身に付ける必要があると、そういう流れはずっと入って来て、まあそれが乳幼児相談なんかでも手話を使うという方向にも行ったと思います。

それまでは日本の場合、手話というのは「上の方から入れる」というかたちでした。高等部の生徒も社会人になるんだから、社会に出れば手話が必要なんだから、大きい生徒に手話を使うのはいいと、「上から段々下に降りてくる」という流れでした。バイリンガルが入って来た影響として、今度は逆に「小さい方から上に」に向かっていくという新しい流れになりました。

TCとバイリンガルの手話に対する考え方の違いー栃木式同時法・口話併用手話・日本手話

上農／そうすると、所謂 TC の場合は同時法的な考えも流れ込んでいたという意味ではどちらかという対応手話がベーシックなイメージだったと思います。しかし、バイリンガルになると所謂自然言語的な手話というか、日本で言うなら日本手話を小さな時からネイティブサイナーである聾者と接しながら、親も含めて学んでいくということになると思います。つまり、TCの中でとバイリンガルの中では手話の位置づけが違うと思うんですが、その点は当時、どんな議論になったのでしょうか？

矢沢／この前、お話ししたように、TC の中で手話を使うと言っても、厳密な意味での同時法を実践していたのは栃木聾学校だけですよね。他の聾学校はそういう手話ではなくて、「意味に合った手話」、「意味によって使い分ける手話」ということで、成人の聴覚障害者で喋りながら手話をする、口話併用手話という感じですよ。だから、その手話というのは同時法とはかなり違うということです。

また、小さい子どもの手話というのはある意味で身振りの発展したような形で、同時法とかとは全く関係のない別のものですよね。指文字を沢山使うということによって日本語を習得するというものです。

音声と文字が一致していない欧米語における指文字の意味

矢沢／デンマークやスウェーデンの場合には、デンマーク語にしてもスウェーデン語にしても、あそこに指文字ってあるのかな、英語と同じでもって文字と発音というのはズレていますよね。そういう意味では指文字やなんかで読話の補助手段にするという考えは元々ないと思います。

上農／あくまで文字を書く時のスペリング（綴り）として表すわけですからね。

矢沢／それと、バイリンガルが登場してきたというのは、同時に並行して聴覚活用も入ってきたわけです。

聴覚活用への評価の変化－それまでは積極的に採用していたのは日本聾話学校だけだった

上農／「聴覚活用も入って来た」というのはどういうことですか？

矢沢／今でこそ聴覚を使うことは当たり前のことのように皆思っているんですが、1980年ぐらいまでは、私が聾学校に入ったのが1970年代で、その頃は聴覚を本当に使うという考えを持っているのは日本聾話学校くらいじゃなかったでしょうか。（校長の）大嶋先生はとにかく耳を使うという考え方でした。読話とかそういうのもあまり重きを置いていなかったんじゃないかな。とにかく耳を使う。そのためにも補聴器の改良とか赤外線の利用とかいろんな工夫をしていました。ですから、本当に耳を使うということをやっていたのは日本聾話学校と金山（千代子）先生ですね。

上農／トライアングルですね。

矢沢／金山先生はトライアングルに行く前に附属聾学校で難聴児を主にやっていたのかな。難聴児については耳を使った教育が効果があったので、難聴児教育の中では耳を使うことをやっていたのです。それ以外の普通の聾児については口話法と言ったら読話と発語ですね。それで補聴器というのは、まあ付け足しみたいなもので、それがたまたま役に立てばいいけれども、立つかどうかはわからないという感じでした。

それが1980年代、90年代になって90デシベルくらいの子ども、あるいはそれより聴力が厳しい子どもでも聴覚利用が音声言語の獲得に役に立つんだという考え方を聾学校が本格的にするようになったという変化があったと思います。

それにはこの前紹介したアメリカのベル研究所のような所の知見の影響もあったかと思っています。単に補聴器を改良すればいいとか、ことばの訓練をすればいいとかいうのではなく、やはり親子のコミュニケーションが大切なんだと、その中での聴覚利用、耳を使って、他の手段も使ってやるという、単に聴力で音を聴かせるというだけではなくて、心理的な面とか愛着関係とか、そういうものを大切にするという考え方ができてきました。それによって音声言語の習得に役に立つんだということでした。金山先生なんかはそういう考え方で「母と子の教室」でやり出したと思います。

そういう意味ではトータルコミュニケーションの考え方と共通する面もあるわけなんです。本格的にそういう聴覚活用ということを出したのは割と80年以降だと思います。それまでは聴覚活用というのは難聴の子ども向けのものであったと思います。難聴教室とか、ごく一部の聾学校、日本聾話学校とか、そういう所だったと思います。

上農／ということは、バイリンガルという考え方が入って来た時に、同時に、別に聴覚活用が新しい時代になったということでしょうか？

デンマークのバイリンガル教育の視察

矢沢／デンマークなんかは、バイリンガルでやると同時に聴覚活用も非常に力を入れてやっていたのです。デンマークの幼稚園の視察にも行ったんですが、日本人の夫婦でデンマークにいて、そのお子さんが聞こえない子どもがいて…

上農／それは九州の宮崎大学の先生ですよ。私は宮崎にいた時にその先生とはお会いしました。

矢沢／子どもさんがその後、どうなったのか知らないけれど。デンマークの幼稚園を視察したんですが、数十人の小さい規模の幼稚園だけど、聞こえない子どもが何人かいて、大半は聞こえる子どもでした。そこで聞こえる子どもも手話を使っていてコミュニケーションしていたんだけど、やはり聾学校の先生のような人がいて、そこで聴能教育のようなこともやるんです。デンマークは補聴器も発達していたので、バイリンガルでやって、スウェーデンも、そしてある時期からほとんど聴覚中心に変わっちゃったんですね。ま、その後どうなったのか、わかんないんですけど。

ですから日本でも足立聾学校なんかでも前田さんが一生懸命、聴覚活用をやっていて、一時、聴覚手話法みたいなこともやったし、奈良聾学校も、あそこの校長さんが聴覚活用に熱心な人で、今でもそうだと思うんですが、手話もやるし聴覚もやるという形でやっていますよね。

上農／今、先生が仰ったんですが、バイリンガルというものの新しい面というのは、上からことばを教え込むということではなくて、小さい時から家族も親も一緒になって手話を学んだり、そのような環境を早い段階から作っていくという所が新しさということだったんでしょうか？それが日本の聾学校の乳相とか幼稚部あたりの対応に影響を与えていったということでしょうか？

じゃあ、TC 研としてもバイリンガルという新しい考え方のいい所は取り入れていこうという形になったということなのではないでしょうか？

矢沢／デンマークでやっているようなバイリンガルそのものをやるっていうふうにはならなかったし、それもはっきりとは出来ないと思うんですけど。小さい子どもを持っている親に手話を覚えて貰う。それで乳幼児にとっての親子のコミュニケーションに手話とか身振りも使う必要があると、そこら辺は南村（洋子）さんが一番取り入れたわけですね。

連絡協議会の方としてはバイリンガルをデンマークから取り入れたということが一つの成果だったと思います。それと、何百人という規模で参加者も増えて、分科会も言語の分科会だけではなくて、いろんな教科の分科会とか重複の分科会とか難聴児の分科会とか、いろんな分科会をたくさん作りました。聾学校のいろんな分野にまで広げて行ったということがあります。

討論集会運営の大変さ

討論集会は各地で順繰りにやっていくんだけど、会をやれる場所というのは限られて

くるんです。どこでも出来るというわけじゃないから。やはり聾啞連盟が弱い所、聾学校が弱い所では集会をやろうと思っても出来ないし。それで、ある時期から持ち回りも止めてしまったと思います。

それで連絡協議会として考え方を纏めた方がいいということで、安藤さんと相談して…纏めた冊子はそちらの方には行っていますか？その資料が今、手元にはないみたいで見つかりません。その纏めた冊子は聾教育のいろんな分野ですね、乳幼児教育から教科教育、職業教育、難聴教育、それから教員養成の問題等の項目ごとに専門家とか担当者を決めて、「明日を考える会」の全国討論集会の討論の中でもって出てきた考え方を成果として纏めた、そういう冊子を作ろうということで、それを二年がかりで作りました。大杉（豊）さんなんかも中心になってやっていて、彼はどこかで手話について書いていたと思います。

…ということで、大体以上がトータルコミュニケーション研究会に関して私がお話できることでした。

上農／先生、3回にわたって長いこといろいろ聞かせていただいて有難うございました。大変貴重なお話でやはりきちんとお話を聞いておいて本当によかったと思っています。また、大切な資料も数多く送っていただき、その点も心から感謝します。

矢沢／私も健康には自信がなくなってきたので、今回、話を聞いて貰って良かったと思っています。

上農／それではこれで3回にわたるロングインタビューを終わりたいと思います。長い時間、お話しいただき本当に有難うございました。

（全インタビュー終了）